言葉の危機と「メガマシーン」

― ニコラス・ボルンの〈文学〉とテクノロジー批判 ―

杵渕博樹

Die Sprachkrise in der Zeit der *Megamaschine*

― Nicolas Borns Poetik und Technologiekritik ―

Hiroki KINEFUCHI

１． 序

病に倒れ早すぎる死を迎えた詩人ニコラス・ボルン Nicolas Born (1937-1979) の晩年は、戦火のレバノン、ベイルートへの取材行とその成果である小説『捏造』の執筆に捧げられた。そこでボルンは出口なき内戦と、それを報ずるべく現地に赴きながら、語る言葉を失っていくジャーナリストを描いた。しかし、この作品の冒頭は、閉塞と硬直を暗示する静けさでもって、戦場の混乱を描く主要部分と鮮やかなコントラストを成す。

> 朝にはあらゆる湿気があらためて凍りなおしていた。ちょうど溶けようとしていたもの、弱々しい一色のものどもすべてがまた固まり、寒さのただの一撃に硬直していた。[1)]

この情景を主人公は見ていない。実はこの小説『捏造』は主人公を三人称で扱っているのだが、作品のほとんどの部分は主人公の体験と心理を追っているため、冒頭のこの情景描写は例外的な記述なのである。この描写の直後、主人公は車のエンジンの音を聞いたことをきっかけに、世界がまた「色彩を取り戻した」ように感じる [2)]。ここでボルンは、主人公の外部から内部へと視点を移しており、そのプロセスをあえて提示しているのだ。こうして物語世界は二重化される。『捏造』は主人公であるジャーナリストの目を通した物語であった。この物語装置を経由させず、匿名の語り手が直接眺めている一瞬の情景を切り取ったその場面は、物語記述の内部にありながら、〈物語〉を取り囲む外部の世界を描写し、この作品を執筆するボルンのいる場所を暗示している。

それではこの語り手は〈どこ〉にいたのか。彼が見ていたのはどんな世界だったのか。同時期の、詩人、思想家としての彼の作品は、現代文明批判、あるいはテクノロジー批判をひとつの主要テーマとしている。本論では、エッセイ『機械の世界』[3)]といくつかの叙情詩作品の分析を通して、彼のテクノロジー批判の思想的特質、およびその詩作品における反映に考察を加える。

[1)] „Am Morgen war alle Nässe erneut überfroren. Alles gerade noch Schmelzende, hinfällig Einfarbige war wieder fest, erstarrt in einem einzigen Kälteschock.“ Born, Nicolas: Die Fälschung. Roman. 1979. Reinbek bei Hamburg 1993. S.7.

[2)] Ebd.

[3)] Born, Nicolas: Die Welt der Maschine. 1977. In: Born, Nicolas: Die Welt der Maschine. Aufsätze und Reden. Reinbek bei Hamburg 1980. S.12-29.

２．　「誰ひとり自分のためでなく、みなが誰のためでもなく」

どう私に感じられるか　そのむき出しの光は
そのなかに私は静かに、沈みこんで、息しつづけ
―　片付けられた広間、椅子は机の上
私がこれほど偶然だったことはない [4)]

抒情詩『誰ひとり自分のためでなく、みなが誰のためでもなく』の冒頭、一人称の語り手は、「むき出しの光」の中にいる。広間は片付けられたあとなのか、椅子は机の上にのせられている。なんらかの行事がもう済んでしまっていることの暗示である。語り手の到着は遅すぎたのか、それとも、語り手自身これに参加していたのかは、まだわからない。あるいはこれからなにかが始まるのか。その状態を受けて述べられる、自分が「それほど偶然だったことはない」という感想は唐突だが、一種の無力感の表白である。ここで語る主体は、少なくともそれまでは、一定の必然性のなかに自分の存在と行為を位置づけることができていたと感じているのだ。

現世は繰り返した、思うに君と私は
私たちは勢いをそがれ、後に続くものはなにもない。
勝手知る道はなくなり
なにかいずれかの目的のなかで待ち構えられ

待ち構えられたニュース、見せかけの生活
途方もないデータが求められる。
けっこうな窮状だ、それらを欠けば私は取り乱し
いたるところ眠っている金は投資を促され

窓から私は見る　ひとの群が
ホールのなかへ入っていく、サラサラ唸る機械のなかへ
表情はうつろ、朝は空っぽにされ

もはや誰も自分のためではなく、みな誰のためでもなく [5)]

やがて第三節に至って「私」は「君」に言及し、「君と私」は「私たち」と呼ばれるが、この同志たちはすでに挫折している。かつて歩んでいたはずの道は、なんらかの「目的」によって評価されることを拒むような性質のものだったのであろう。こうして最初に表明された無力感の背景が埋められていく。これに続いて列挙されるものはどれも、ひとことで言えば、近視眼的な経済至上主義のもたらす諸情景であり、これを揶揄する表現だ。語り手たちは、これに抵抗してきたのかもしれないが、いまや彼自身もまた駆り立てられ、巻き込まれつつある。

[4)] „Wie es mir vorkommt das kahle Licht / in dem ich still, eingesunken, weiteratme / ― geräumter Saal, Stühle auf den Tischen / ich war nie so zufällig“. Born, Nicolas: Keiner für sich, alle für niemand. 1979. In: Born, Nicolas: Gedichte. Hg. v. Katharina Born. Göttingen 2004. S.206.

[5)] „Die Erde wiederholte sich, ich glaube du und ich / wir sind jetzt kaltgestellt, Vorfahrn von nichts. / Vertraute Wege sind weg / in irgendwelchen Zielen abgefangen / Abgefangene Nachrichten, scheinbares Leben / Datenungeheuer werden gesucht. / Gute Not, ihr Fehlen macht mich kopflos / überall verlangt das stille Geld zu arbeiten / Vom Fenster aus seh ich die Menge / eingehn in die Hallen, in rieselnde Maschine / geplünderte Gesichter, der Morgen leergemacht / keiner mehr für sich, alle für niemand“. Ebd.

そして彼がおそらくはかろうじて距離を取りながら眺めるのは、無表情に機械のなかへ飲み込まれていく朝の群集である。この情景描写に現れる機械の唸りは、作品で最初に聞こえてくる音であり、また、唯一の音である。「私」が気づき、聞きとる単調な無機的雑音、それは抽象的な風景に感覚的な契機を与える。それ以外、この世界には、感覚的に受容できるような、身体レベルでの生々しさを伴うものが欠けている。ただし、それはあらかじめ欠けていたのではなく、失われてしまったのだ。この敗北感の漂う、寒々しい光景は、ボルンが『機械の世界』において論じる、「メガマシーン」の支配する世界を暗示している。

３．メガマシーン

ボルンは彼の生きる現在、すなわち 1970 年代を、「最大の道具」の時代と呼んだ。ここで、『機械の世界』で彼の展開する議論を追ってみよう。

> 私たちは最大の道具の時代に生きている。国内および国際産業コンツェルンは巨大な道具独占体となり、そうすることでまたしばしば決定的な、政治的道具となる。それはそれ自体、制度的に、それ自身の中から、規範としての機能亢進を発達させてきたのであり、これが私たちに刻印を与え、私たちを屈従させているのだ。選挙で選ばれた政府や議会はしばしば、**メガマシーン**がそれ自身を〈事の必然〉へと拡張してゆくために作り出すものを、ただ法律によって追認するばかりだ。[6]

初め複数形で言及された「道具」は、まず、複合的大企業の独占対象として位置づけられる。さらに、やはり最初は複数で名指される「産業コンツェルン」、そして「道具独占体」は、ひとつの「決定的、政治的道具」、すなわち、「メガマシーン」を形成する。「規範としての機能亢進」なる表現は、強迫的な経済規模の拡大を示唆しつつ、医学の術後の使用によって、この「メガマシーン」の有機的、自律的存在様式を印象づける。それはみずからの内的要請にのみ従って成長し、この世界の普遍的なルールそのものになろうとする、すなわち、一体として世界を覆い尽くそうとする怪物だ。

ここでボルンは、「道具の所有」と「生産」からなるマルクス主義的図式を、テクノロジー批判の文脈へと導く。最大の利益を上げるべく決定権を行使しているのは、あいかわらず道具の持ち主たちなのだが、彼らもまた「有用性と進歩の概念」に囚われているため、「もはや、生産の仕方や、ましてやその結果についての決定の自由を持ってはいない」(13)のである。

> ひとつのテクノロジーが人間に利益をもたらすのかあるいは不利益をもたらすのか、もはや誰ひとり決定できる状態にない。誰ひとりこのメガマシーンを支配してはおらず、逆に、全員がメガマシーンに支配されているのだ。[7]

テクノロジーの功罪を問うことが不可能であるという状況認識は、人類全体がメガマシーンに支配されているという比喩へと展開されている。ここでのメガマシーンは批判を許さないテクノロジーの進歩を象徴しているといえる。

ここで確認できるメガマシーンの特徴は、巨大多国籍企業に代表される国際的な資本の集

---

[6] „Wir leben in einer Zeit größter Werkzeuge. Die nationalen und multinationalen Industriekonzerne sind zu gigantischen Werkzeugmonopolen geworden und damit auch zu einem oft entscheidenden, politischen Werkzeug. Sie selbst haben, institutionell, eine normative Überfunktion aus sich selbst heraus entwickelt, die uns prägt und unterwirft. Die gewählten Regierungen und Parlamente bestätigen oft nur per Gesetz, was die *Megamaschine* zu ihrer eigenen Expansion an «Sachzwängen» produziert hat.“ Die Welt der Maschine. S.13. 以下、『機械の世界』からの引用、参照に際しては、丸カッコにページ数のみを示す。

[7] „Niemand ist mehr in der Lage zu bestimmen, ob eine Technologie den Menschen zum Vor- oder Nachteil gereichen wird; niemand beherrscht die Megamaschine, vielmehr beherrscht sie alle.“ (13)

中と、それによって実現する、道具としての生産手段の地球規模での有機的統合のイメージである。また、ここでは、経済学的な意味での資本そのものの性質よりも、最終的には、それが物質的に実現することを助けるテクノロジーの性質が重視されている。そして、テクノロジーそのものが、一般に、「有用性」と「進歩」の概念にかなうと信じられていること、言い換えれば、テクノロジーの進歩が、即、人類文明の進歩を意味するような状況が問題視されている。その文脈では、このメガマシーンの急速な成長を促しているのが、当面は西側資本主義諸国であったとしても、社会と文明の進歩の体現を自認するマルクス主義あるいは社会主義の立場もまた、原理的にはメガマシーンと無縁ではなかったことになる。

４．ビッグ・ブラザーと高速増殖炉

さて、メガマシーンは、「ビッグ･ブラザー」および「高速増殖炉」という姿で現れる。

> メガマシーンというのは、私たちみんなの作品、最初から私たちが自分のなかに持ち続けていた作品なのか。それがついにビッグ・ブラザーと高速増殖炉という姿をとって、私たちに、ともかくも常に望まれてきた引退を可能にしてくれたということなのか。[8)]

ボルンはドイツ語の「ブラザー」Brüder と「増殖炉」Brüter（ともに複数形）で韻を踏んでいる。「ビッグ・ブラザー」*Große Brüder* なる呼称は、言うまでもなくジョージ・オーウェルの小説『一九八四年』における独裁者に由来する [9)]。この作品は、スターリニズム批判にとどまらず、より普遍的に、全体主義・管理主義社会の悪夢を描いた。そこでは「テレスクリーン」と呼ばれる装置がどの住居にも設置され、国民は監視され、同時に特定の情報が押し付けられていた。これは、コンピュータテクノロジーおよびマスメディア、あるいはコミュニケーションテクノロジーの進歩と普及を前提にした状況である。ボルンの『機械の世界』が執筆された 1970 年代後半においては、少なくとも一般家庭へのテレビの普及により、そのような状況の実現は、より現実的なもの、あるいはより容易に想像されうるものとなっていたはずだ。あらゆる先端的テクノロジーが、その開発においても、管理においても、コンピュータの演算処理能力に依存せざるをえない状況が実現しつつあった。

他方、「高速増殖炉」*Schnelle Brüter* とは、燃料にプルトニウムを使用し、冷却材に水ではなくナトリウムを使用するタイプの原子炉で、通常の原子炉よりも制御が難しい [10)]。1986 年のチェルノブイリ原発事故以来、さらには 2011 年の福島原発事故以来、原発事故のもたらしうる壊滅的被害は比較的よく知られるようになったが、その危険性は 1970 年代にはすでに指摘されており、ドイツでは反原発運動が激化していた [11)]。

この「ビッグ･ブラザー」と「高速増殖炉」のコンビは、それぞれ、超管理社会と破壊的テクノロジーの一人歩きを象徴している。メディア･テクノロジーと、社会のすみずみにまで行き渡ったコンピュータ管理に支えられた全体主義社会においては、独裁者の人格などはもは

---

8) „Ist die Megamaschine unser aller Werk, das wir von Beginn an in uns getragen haben? Ermöglicht sie uns endlich in Gestalt *Großer Brüder* und *Schneller Brüter* den sowieso und immer beabsichtigten Abgang?“ (15)

9) Orwell, George: Nineteen Eighty-Four. 1949. The Complete Works of George Orwell. London 1987. Vol.9.

10) この分野での先進国であったアメリカ、イギリス、フランス、ドイツはすでに実験炉をすべて閉鎖しており、2010 年の時点で、高速増殖炉の運転実験を継続しているのは、ロシア、中国、インド、そして日本のみである。参考：日本原子力研究開発機構次世代原子力システム研究開発部門：高速炉サイクル技術の国際動向（平成 22 年 12 月 16 日、第２回 FaCT 評価委員会、資料３）http://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/energy/fact/002_03_00.pdf　また、福井県敦賀市にある日本の高速増殖炉「もんじゅ」は 1995 年にナトリウム漏洩火災事故を起こして以来、2012 年現在も停止中である。参考：日本原子力研究開発機構敦賀本部ウェブサイト内「もんじゅ性能試験再開」ページhttp://www.jaea.go.jp/04/turuga/monju_site/page/rks.html

11) Vgl. Klein, Marx / Falter, Jürgen W.: Der lange Weg der Grünen. München 2003. S.21.

や問題にはならず、場合によっては、その実在すら必要ない。システムそのものがそれ自身の拡張、更新、延命を行うのである。また、人類の存亡にかかわるような破壊力を伴う大規模なテクノロジーは、それを管理する、管理しているはずの人間たちの意志の如何を問わず、たとえば、資本主義あるいはマルクス主義に対する政治的な立場の如何を問わず、まず第一に、大事故の際には責任が取れず、第二に、安全管理上、国防上、たとえば、テロに対する警戒などの理由から、住民、国民に対する監視を強化せざるをえない[12]。このふたつの特徴は、「ビッグ・ブラザー」的なる超管理主義社会に通じている。安全や治安を口実にした監視体制によって反対派もしくは異分子を排除しつつ、あらかじめすべての構成員が、思考や意識のレベルから同化され、統合されているような社会システムにおいては、そのシステムそのものに起因する膨大な損害、損失が生じたとしても、その責任の所在は特定しえない。これは、大規模な破壊的ポテンシャルを持つテクノロジーの管理において最終的な責任を果たすことの不可能性に相応する社会的状況である。

ボルンはメガマシーンによって全人類が支配されるというイメージを提示しているが、この、道具と人間の間での支配関係の転倒そのものが既に、個々の人間の政治的・社会的責任の相対化を意味している。この問題については、ギュンター・グラスもまた同様の危機感を表明していた。人間は「コンピュータ」あるいは「装置」に「人間的責任を委ね始めて」おり、「責任から解放され、無責任」になろうとしているのだ[13]。このコンピュータ管理の高度化のもたらす社会的責任の概念の変容への懸念は、ボルンの問題意識に通じるものであると言える。グラスは、1986 年、核戦争による人類滅亡をテーマとした小説『女ねずみ』Die Rättin を発表しているが、その背景となっている思想は、先駆的なものというより、当時の西ドイツにおけるテクノロジー批判の流れに沿ったもの、それを踏まえたものであったと言えるだろう。このふたりには交流があり、グラスが 1980 年に発表した『頭脳出産』Kopfgeburten では、癌に冒され、亡くなる直前だったボルンを病床に見舞った際の様子や、60 年代ベルリンでの思い出、葬儀の情景などが描かれている[14]。この『頭脳出産』自体が、反原発運動をひとつの重要なモチーフにしていることからして、ここでグラスがボルンの議論からも学んでいたことは想像に難くない。

> 今日容易に見て取れる、全体的かつ全体主義的独占体への道の頂点が、メガマシーンのふたつの全能の部門（…）、すなわち原子炉（発展目標は高速増殖炉）およびこれと対をなすデータ処理コンピュータであり、それは諸国民を束ねる新たなる拘束衣なのである。[15]

このボルンの記述は、先に参照したグラスの表現と比べると、より深刻な調子で語られているように見える。70 年代半ばから 80 年代半ばにかけて、彼らが懸念していた状況は進行こそすれ、緩和されてはいなかったはずだが、10 年後のグラス以上に、当時のボルンは厳しい認識を示していたといえる。

---

[12] Vgl. Jungk, Robert: Der Atomstaat. Vom Fortschritt in die Unmenschlichkeit. München 1977. 邦訳：ロベルト・ユンク著、山口祐弘訳『原子力帝国』(1979 年、アンヴィエル)

[13] Grass, Günter: Mir träumte, ich müßte Abschied nehmen. Interview. 1986. In: Werkausgabe in 10 Bänden. Hg. v. Volker Neuhaus. Luchterhand: Darmstadt und Neuwied 1987. Bd.10. S.352.

[14] 葬儀はボルンの自宅近くの Dannenberg で行われ、グラスも参列しているが、ここが当時すでに高レベル放射性廃棄物処分場予定地に選定されていた Gorleben の近郊であることにもグラスは触れている。Grass, Günter: Kopfgeburten oder die Deutschen sterben aus. 1980. In Studienausgabe in 12 Bänden. Hg. v. Volker Neuhaus, Daniela Hermes. Steidl: Göttingen 1993. Bd.8. Hier, S.46-47, 108-111.

[15] „Der heute leicht absehbare Höhepunkt auf dem Wege zum totalen und totalitären Monopolwerkzeug sind zwei omnipotente Branchen der Megamaschine, (...): Atomreaktoren (Entwicklungsziel: Schnelle Brüter) und Datencomputer als Pendant dazu, die neue völkerverbindende Zwangsjacke.“ (22)

５．放射性廃棄物

この原子力発電の問題を、詩人として、文学の担い手として、ボルンがどのように感じ取っていたかは、『処分済』entsorgt (1978)と題された詩において集中的に表現されている[16]。entsorgt とは、放射性廃棄物の処理を意味する動詞の過去分詞であり、「廃棄のための処理」のなされた状態を意味する。「懸念の除去」とも読めるこの単語の構造は、きわめて皮肉なものであると言える。原子力発電によって生じる放射性廃棄物の処理方法は、作品の書かれた 1970 年代当時も、2012 年現在もなお、確立されていないからだ。いわゆる高レベルの放射性廃棄物は本来なら万年単位で環境から隔離する必要があるが、今のところそれを保障するような手段は存在しない。

そして終わりなき恐怖はゆっくりとふつうの生活になる
（…）
私は言えない、どのように物質のパニックが作用するのかを、私が私のパニックのなかで
個人的ではないパニックのなかで、どのようにただ間違った言葉にしかたどりつかないかを。
懸念する美は**クリプトン**と**ヨウ素 129** のせいで私には欠けている。私には未来の未来が欠けている。
私にはそれが欠けているのだ。[17]

原発の運転と放射性廃棄物の蓄積による「終わりなき恐怖」は「通常の生活」となる。そもそも「物質のパニック」を感じ取ることはできないが、それを言い表すことの難しさに、語り手は「自分のパニック」を対置しつつ、そのような状況下での言葉による表現の困難一般に言及する。放射能というテーマを感覚的に言葉に定着させることの難しさが最初に告白されているのである。クリプトン 85 とヨウ素 129 は、核分裂によって生じ、核爆発や原発事故の際に気体として大気中に放出される放射性物質の代表例である。この作者には「懸念する美」は表現しえない。取り扱いえない物質が、そのまま言葉の世界に侵入してくるからだ。語り手に「欠けている」のは、単なる「未来」ではない。ここで感じ取られているのは、本来はそうであるべき、個別のものとして連綿と連なってゆくべき「未来」の欠如であり、「未来」という概念そのものに未来がない状態である。そしてこの予感の場としての主観は、「私には」とイタリックで強調される。ここでは、ある種の欠如が個人のレベルで生じていることが際立ち、そのような個人としての「私」のパニックがまさに〈個人的なものではなかった〉こと、非個人的なことがらに由来することと対比させられているといえる。

ここに強い言葉どもの結果が生じる
生きていない言葉どもの、この不埒なやくざ者は何も感じない、連中はカルテルを結び
この大地に何をもたらすかなど予感のかけらもなく
予感はなく、ただ知識だけ
この大地に、空気にそして水にずっと何をもたらすか
「ずっと」という感覚もなく[18]

---

[16] Born, Nicolas: entsorgt. 1978. In: Born, Nicolas: Gedichte. Hg. v. Katharina Born. S.235-236.
[17] „So wird der Schrecken ohne Ende langsam normales Leben / (…) / Ich kann nicht sagen, wie die Panik der Materie wirkt, wie ich in meiner Panik / die nicht persönlich ist, nur an die falschen Wörter komme. / Das sorgend Schöne fehlt mir an *Krypton* und *Jod 129*. Mir fehlt die Zukunft der Zukunft / *mir* fehlt sie.“ Ebd. S.235.
[18] „Hier entstehen Folgen starker Wörter / die leblos sind, das verruchte Gesindel spürt nichts, sie schließen die Kartelle / keine Ahnung was sie in die Erde setzen / Ahnung nicht, nur Wissen / was sie in die Erde setzen in Luft und Wasser für immer / kein Gefühl für »immer«.“ Ebd. S.235.

ここで言われる「生きていない強い言葉の結果」とは、直接的には、本来は自然界に存在しなかった放射性物質の名と、それが人類にもたらす悲惨な結果を指すと考えられる。語り手が激しく非難する、そのようなテクノロジーの担い手たちには、「知識」だけがあって、「予感」も「感情」もない。テクノロジーによる、自然、あるいは物理的現実の、根本的次元での破壊が、言葉の問題としての側面を持つという認識がここでは示されている[19]。

なぜおまえたちは私の子どもの子どもたちの墓を荒らすのか
なぜおまえたちは物質の夢を奪うのか
絵画の、織物の、書物の夢を
　骨を[20]

「未来の未来の欠如」は「子どもの子どもたちの墓が荒らされる」との表現に具体的な像を結び、破壊的テクノロジーを体現する「おまえたち」は、「物質の夢」を奪うが、続いて挙げられる「絵画」Bilder、「織物」Gewebe、「書物」Bücher は、どれも精神的な作業と手作業、知的労働と身体的労働を経て初めて〈物質〉として定着される人間の仕事である。さらに、Bilder は画像的イメージ一般、Gewebe は身体組織をも意味するため、この箇所は「イメージの、身体組織の、書物の夢」とも読める。このように、ここでは、語り手の〈生活〉感覚における、「物質」と、「イメージ」や「言葉」との相応関係が再び示されると同時に、そこに身体性、あるいは物質としての身体の要素が加えられ、最後に「骨」という言葉が、まさにむき出しの形で投げ出されることによって、状況の核心が集中的に表現されている。奪われていく夢と隣り合う、この「骨」の露出は、生きる主体にとって、端的に死と死後に残される生の証を象徴する。その略奪は人間にとっての時間の積み重ねの否定である。

６．言葉の危機

1977 年 4 月、ボルンはグラスに宛てた書簡の中で「趨勢としてはもうすでにビッグ・ブラザーの『一九八四年』の年になってしまいました。(…) **ビッグ・ブラザーの言葉**は鎮静剤的語彙で公衆を毒しています」と述べている[21]。その「鎮静剤的語彙」の例として、前節で取り上げた作品『処分済』のタイトルとなっていた entsorgt の名詞形である Entsorgung もまた挙げられている。『処分済』が描いていたのは、「ビッグ・ブラザーの言葉」によってもたらされる情景なのである。

「ビッグ・ブラザーの言葉」という表現は、オーウェルの『一九八四年』において「二重思考」Doublethink や「新言語」Newspeak と称されているものを想起させる。そこでは、言葉は本来の意味を失い、支配体制の都合に合わせてその都度別の意味で使われていた。ま

---

[19] ここで「未来が失われようとしていること」に対して、「私」は「ふさわしい言葉を語る能力の喪失」という反応を見せている。また、「強い言葉どものもたらす結果」は、結局は「詩の可能性の条件を制限する」ことになるのである。Vgl. Kramer, Sven: Über den vielfachen Ort des Politischen in der Literatur. In: Kramer, Sven / Schierbaum, Martin (Hg.): Nicolas Born und die politische Literatur, 1967-1982. Berlin 2010. S.25. この『処分済』から読み取ることのできる「詩の可能性」への危機感は、『機械の世界』で〈言葉〉の危機を巡って展開される議論に対応するものである。

[20] „Was schändet ihr die Gräber meiner Kindeskinder / was plündert ihr den Traum der Materie, / den Traum der Bilder, des Gewebs, der Bücher / Knochen.“ Born, ebd. S.235-236.

[21] „(...) tendenziell ist das Jahr des Großenbruders »1984« bereits erreicht. (...) DIE SPRACHE DES GROSSEN BRUDERS vergiftet die Öffentlichkeit mit Tranquilizer-Vokabeln (...).“ Born, Nicolas: Briefe 1959-1979. Hg. v. Katharina Born. Göttingen 2007. S.206. 「鎮静剤的語彙」の例として、「ゴミ処理」Entsorgung、「生活の質」Lebensqualität、「余暇価値」Freizeitwert、「市民目線」Bürgernähe、「職場創出」Arbeitsplätzebeschaffung、「近郊保養地」Naherholungsgebiet、「実行可能性」Machbarkeit、（あらゆる措置を講じたあとにも残るという意味での）「残存リスク」Restrisiko、「客観化」Versachlichung などが挙げられている。

た、同時にさまざまな新語が導入され、伝統的な語彙は減少していた。ボルンによれば、そのような状況がすでに実現しつつあるというのだ。公の言語環境は、「鎮静剤的」新語によって汚染されている。このような語彙の例は、『機械の世界』においても多く掲げられている[22]。このような現象もまたメガマシーンによるメガマシーンのための動作環境の整備の一環である。

原子力発電を巡る言説もまた、「ビッグ・ブラザーの言葉」あるいは「鎮静剤的新語」に事欠かない。「広島と長崎以来、原子力の平和利用」の名のもとに抵抗は抑圧され、「原発は安全で環境に優しい」というプロパガンダのもとで、新たなる道具独占体としての原子力発電産業に道が開かれ、そこには産業界と国家から莫大な予算がつぎ込まれた(22-23)[23]。ボルンによれば、仮に批判や保留を伴った上であったとしても、このような「鎮静剤的語彙」、あるいはその概念を使用することそのものが、メガマシーンに組み込まれることを意味する(24-25)。メガマシーンは言葉を単なる「情報システム」へと堕落させてしまうのである。そこでは、空虚な言葉だけが響き渡り、「沈黙」をも含めた全体的な言語能力が否定されるという(15)。すなわち、「言葉」と「現実」との関係は断ち切られ、言葉はただ「反射」の契機となり、「信号」となり、「スローガン」となる(17)。そして、このような「現実」と切り離された「言葉」は、この「機械の世界」においては、「第二の現実」を構成する。「表面的認知に特化した見せ掛けの現実」はメディアによって作られ、伝えられるが、このメディアはわれわれの公共生活において重要な位置を占めている。この「第二の現実」から逃れることはできないのだ(16)。

そのような言語状況において、言葉を生業とする者たちには何が起こるのか。ボルンはここで言葉を扱う職業人を一種の手工業者と考える。この図式によって、メガマシーン的な産業化によって衰退する手工業一般に、「言語による表現能力の部門全体」もまた数えいれられる。手工業とともに失われてゆくその道具と同様、表現手段としての言葉もまた衰退せざるをえない(17)。もちろん、一般的な意味での、見かけ上の言葉に関わる仕事は残るだろう。しかし、そこでの言葉は、ボルンの言う〈表現能力〉を担いえない。ボルンにとって、言語表現とは、手作業の道具に近いものとしての〈言葉〉が、職人たちの技術と同様、多くの世代によって使用され、学び取られ、感じ取られながら完成するものなのである。

このようにして言葉が本来の意味を失っていく一方で、意味の生産もまた産業化する。「意味生産」という表現は、それだけでも「意味」の物質化のニュアンスを持つが、「第二の現実」における言葉の、軽さと速さ、そして従来の言葉に対する破壊的性質を念頭におけば、それはただの生産ではなく、「意味」の核心の人為的増殖であり、特に高速度の核分裂反応になぞらえることができる。すなわち「意味生産」に携わる人間たちは「上部構造の小型高速増殖炉」なのである(21)。

7．〈文学〉の抵抗

これまで見てきたように、メガマシーンの輪郭は、テクノロジーの扱うエネルギーの大規模化とそれに伴う管理体制の強化のうちに浮かび上がる。管理主義社会は、その自己保存のために、管理しやすい人間を求めるが、同時にメガマシーンは、労働力としての人間をます

---

[22] 「私たちの（私たちの？）言葉のなかにも、メガマシーンの言葉が聞こえる。:〈私たちは平和を作り出しています〉(連邦軍)、〈産業に投資されれば、それはまず新たな雇用を作り出す〉、〈より少ないお金でそれ以上の車を〉、〈原発なしではやっていけない〉。„Wir vernehmen die Verlautbarungen der Megamaschine in unserer (unserer?) eigenen Sprache: «Wir produzieren Sicherheit» (Bundeswehr); «Wenn die Industrie wieder investiert, dann produziert sie zuerst neue Arbeitsplätze»; «Mehr Auto für weniger Geld»; «Ohne Atomkraft geht es nicht».“ (16)

[23] ただし、ボルンの認識によれば、そのような「危険のなさ」Ungefährlichkeit や「環境への優しさ」Umweltfreundlichkeit のプロパガンダにもかかわらず、すでにドイツではその〈安全性〉の欺瞞と原発事故の危険性は広く知られるようになっている。(23)

ます排除する自己目的的存在様式を持つ(18)。システムへの適合が不十分であれば、行動障害とみなされ、「特に機械の独裁に対する抵抗は犯罪的エネルギー」とされる(19)。人間はメガマシーンに奉仕するが、メガマシーンに切り捨てられれば、「使用済みの燃料」と同じだ(21)。人間の作業を助けるはずの道具が、それへの人間の依存を通じて、いつしか人間を支配するようになる。それが集中的に実現し、制度化するとき、ボルンの言うメガマシーンが実体として姿を現すのである。そこで、言葉を奪われながら、なおも言葉をつなごうとする者は、困難に直面する。

横たわってあるいは立って私は自分の部屋にいた
もうわからない
ちょうど今できなくなった、言えなくなった
できないってことを、明るい太陽を前に、もうわからないってことを前にして
一体何なのか何だったのか [24)]

このような詩節は、当然ながら「個人的ではないパニック」を背景として読まれるべきだろう。この詩は、冒頭に掲げられたこの戸惑いから脱することなく、意味の脈絡から外れた身の回りの事物を名指しながら、詩人の一日を素描するが、この「私」は作品末尾で家族のもとへ向かう前、「座って、書こうとする」。このたった一行で挿入された書こうとする意志の表明には、おそらく重要な意味がある。それはひとつの抵抗なのである。

ボルンは抵抗のための武器としての文学について、以下のように述べている。

もし文学が「革命の武器」でありえないなら、同様にそれは改革の武器としても笑止である。(…) どの「内在的進歩」も、確かに相変わらず部分的改革として示唆されてはいるが、メガマシーンによってその固有の意味において**価値転換**され、それ自身が必要とするエネルギーへと転化されてしまう。[25)]

ここでは、システムに対する内在的な抵抗、いわば体制内修正主義は否定されているように見える。さらに、ボルンはいわば歴史の喪失とも言うべき状況について、絶望的な分析を展開する。メガマシーンに組み込まれた社会において、人間は物質化され、消耗品の一種となり、狭義の有用性によって測られるその寿命は、冷蔵庫や洗濯機などの家庭用電気製品の寿命と同質のものとなる。「この意識は、人間を管理し、監視し、調査する産業装置によって恒常的に強化される」(27)。まさにそれらの装置に依存して人間は生きているのだ。「こうして現在はそのすべての現在化において未来についてのあらゆる観念を吸い上げる」。信仰が失われれば来世もない。そうなれば、未来はただ、〈進歩〉が続く、時間の引き伸ばしに過ぎなくなる(27)。すでに引いたように、詩作品『処分済』においても「未来の喪失」が嘆かれていたが、この「現在」の拡張によって、未来は二重の意味で失われてしまうのである。

メガマシーンによってばらまかれた「スローガンに最終的に身をゆだねること」の誘惑は大きい。それは、「画一的に簡略化された生活」を受け入れること、そしてまた、「地球上のわれわれの存在」を、その「ちっぽけな一般化するエコー」としてしか受け止められなくなることを意味する(28)。なにしろ「ビッグ・ブラザーと高速増殖炉への依存状態によって、その断念や拒絶はいまだかつてなかったほどに困難になっている」のである (29)。ここで鍵に

[24)] “Lag oder stand ich da auf meinem Zimmer / wußte nicht mehr / gerade jetzt konnte nicht mehr, nicht mehr sagen was / vor Nichtkönnen, heller Sonne, Nicht-mehr-wissen / was selbst ist oder war“. Born, Nicolas: Dienstag, 16. August 77. 1978. In: Born, Nicolas: Gedichte. Hg. v. Katharina Born. S.237.

[25)] „Wenn Literatur «Waffe der Revolution» nicht sein kann, so wird sie als Waffe der Reform vollends lächerlich. (…) Jeder «immanente Fortschritt», zwar noch immer suggeriert als partielle Reform, wird von der Megamaschine in ihrem eigenen Sinn *umgewertet*, transformiert zu einer von ihr selbst benötigten Energie.“ (26)

なるのは、「自らの生活を超えて考え、感じること」だが、これは「ほとんどの人間にとって、もはやなじみのない営み」となってしまっている(27)。

ところが、それでもボルンは諦めない。自然のままの生活基盤がますます破壊され、その代替物としての人工的な生活基盤への依存がもはや後戻りできないほどになっていることを指摘した上で、彼は希望に言及する。

> この事実がともかくも、そして比較的多くのひとびとに認知されるようになったということ、そこに、**生**を守るための希望が、励みが存在せねば**ならない**。[26]

そしてこの「希望」あるいは「励み」を補完し、「メガマシーンが体現する理性概念」に対抗するものとして、ボルンは「恐怖」Angst と「情緒性」Emotionalität を挙げ(29)[27]、さらに続けて「そのスローガンを打ち負かすためには千の舌で語ることが必要だ」と述べる [28]。追い詰められた状況をことさらに感覚的に受け止め、あえて「恐怖」に対して回路を開くことは、心的防衛機制の自覚的停止であり、精神的なストレスの意図的容認である。そしてこのストレスに直面しながら、それへの理性的・合理的対処を自制し、「情緒性」を優先する構えを前提とした上で、より多くの言葉が発せられねばならないというのだ。また、その際には、当然ながら、スローガンでもなく、ビッグ･ブラザーの言葉でもない自分の言葉が模索されねばならない。しかし、そのような言葉の再発見、再獲得には、相応の苦痛が伴う。

> どの禁断症状もそうであるように、それはひとつのショックである。ひょっとしたら私たちはこのショックのもとでふたたび言葉を見出すのかもしれない。[29]

この痛々しい言明は、抵抗闘争のための方法論的な指針を示すものではないし、マルティン・シーアバウムがボルンの理論的テキスト一般に関して指摘しているように、自身の文学的営為に「固有の美学」を表明するものでもない [30]。また、それは、『機械の世界』で提示される同時代批判の文脈全体の流れを受け止める地点にあって、狭い意味での政治的立場表明でもない。この、〈文学〉の外部の状況を全力で受け止めながらも、方法論的洗練を拒み、党派的傾向を慎重に回避しながら、表現の道具としての言葉そのものの可能性を守る普遍的次元での実践的闘争に自らの仕事を絞り込んでいこうとする構えこそが、職業的〈もの書き〉ボルンの文学論の核心にあるのだ。同時にまた、この構えは「恐怖」や「情緒性」のような高度に主観的な要素を拠り所にする以上、あくまでも私的・個別的な現場でしか機能しえない。この構えが、自身の悲観的情勢認識にもかかわらず、粘り強い働きかけの覚悟とともに、ある種の必然として導き出される『機械の世界』の展開は、同時期の抒情詩の、怒りや憤りをも淡々とした情景に練りこんでいくような静けさの生成過程を暗示するものであると言える。

---

[26] „Daß diese Tatsache überhaupt und von relativ vielen erkannt worden ist, darin *muß* eine Hoffnung liegen, eine Ermutigung, *das Leben* zu verteidigen.“ (29)

[27] この「恐怖」によって保証された「希望」による、硬直した「理性」への対抗の図式は、ギュンター･グラスにも見られる。Vgl. Grass: Mir träumte, ich müßte Abschied nehmen. S.360-361. また、グラスは冷たい理性を補完するものとして、理性の「夢」あるいは「眠り」の必要性を説いているが、この「夢」と「眠り」はボルンの言う「情緒性」に対応するものと言えるだろう。Vgl. Grass: Der Traum der Vernunft. 1984. In: Werkausgabe in 10 Bänden. Bd.9. S.886ff.

[28] 「千の舌で」mit tausend Zungen なる表現は、一般に、「雄弁に大いに」語ることを意味するが、ここでは、この比喩の持つ本来の具象性によって、語り方や語る主体、語る手段などの多様性とその量の多さが特に強調されていると言える。

[29] „Wie jede Entziehungskur wird sie ein Schock sein. Vielleicht finden wir unter diesem Schock die Sprache wieder.“ (29)

[30] Vgl. Schierbaum, Martin: Der Ekel als Privileg? Literatur und Distanz bei Born und in der politischen Literatur bis in die achtziger Jahre. In: Nicolas Born und die politische Literatur, 1967-1982. S.46-47.

８．結論

以上、見てきたように、メガマシーン概念を中心にすえた、ボルンのテクノロジー批判、およびテクノクラシー批判は、その基本構図においては、例えばハーバーマスがマルクーゼによるマックス・ウェーバー批判に関する考察を軸に展開した技術至上主義イデオロギーを巡る議論にも見られるように、けして目新しいものではない[31]。しかし、原子力利用とコンピュータ管理の典型性に注目しつつ、その特性から〈言葉〉そのものの危機を論じる視点は、自分の生きる時代にリアルタイムで反応しようとするボルンの鋭く柔軟な感覚の独自性を物語っている。彼は、テクノロジーの一人歩きによる人類社会の危機を、文学の危機として捉えなおし、それに対する抵抗の、より一般的な重要性を主張している[32]。この彼の〈文学〉の側からする主張の特徴は、時代状況に規定された思考と言語の枠組を批判的に俎上に載せながらも、それを超えることの原理的・構造的困難を踏まえ、その実践（＝作品執筆）においては、「概念指向的解明」とは異なる仕方で、自身の生きる世界の現実を表現しようとする点だろう[33]。また、ボルンのテクノロジー批判の思想的文脈と、そこでの文学的営為の自覚的位置づけのあり方は、一見、私的、主観的なミニマリズムの様相を呈する彼の叙情詩作品の解釈にあたっても、特に 70 年代後半の諸作品については、常に念頭に置くべき要素であると言える。彼にとって、書く行為は、メガマシーンから自分の〈言葉〉を奪い返す闘争だったのである。[34]

---

[31] Vgl. Habermas, Jürgen: Technik und Wissenschaft als »Ideologie«. Frankfurt am Main 1968. 邦訳：ユルゲン・ハーバーマス著、長谷川宏訳『イデオロギーとしての技術と科学』（1970 年、紀伊国屋書店）また、ボルン自身が『機械の世界』で言及しているように(15, 21)、人間の道具への従属の問題とそれに起因する人間本来の能力の退化への警戒、また、生活文化や手仕事の重要性の再評価などは、当時話題を呼んでいたイヴァン・イリッチ(1926-2002)の思想から学んだものだろう。

[32] この発想の大枠自体は、ギュンター・グラス、クリスタ・ヴォルフらに通じるものと言える。拙論参照：杵渕博樹『ギュンター・グラス『女ねずみ』論　－　人類滅亡のリアリティと「原子力時代」の文学』（2011 年、早稲田大学出版部）96-127 頁。

[33] Vgl. Saupe, Anja: »… für Gerechtigkeit jederzeit, für Freiheit jederzeit, nur wenn man das genauer haben wollte, wurde es schwierig.« Zur ›Unmöglichkeit‹ des Politischen im Werk von Nicolas Born. In: Nicolas Born und die politische Literatur, 1967-1982. S.95-96.

[34] 本論文は『宮崎大学教育文化学部紀要－人文科学－27 号』（2012 年 8 月）、15-17 頁に掲載された論文が査読を経て、『研究論文集－教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集－』に新たに掲載されるものである。